

カナダの自然を愛した 七人の画家

今から半世紀も前に、カナダの大自然をキャンパスにとらえていった、冒険家で、自然愛好家で芸術家の一群があった。彼らは北は北極圏から南は米加国境にいたるまで、カナダをくまなく旅し、新しい画法と活気に満ちた色彩で自然を描いていった。彼らが描いたカナディアン植生地やそびえる山々、静寂な湖水や森林、簡素な農村の風景は、気魄と力強さにあふれ、北方の純色を使ったパレットは新鮮でドラマ性に富む。

彼らの絵画は、確かにカナダにおける当時の画壇の潮流とは一線を画していた。カナダの風景を画題に選び、独特のスタイルでそれを再現することによって、彼らはそれまでの画家がもっていた価値感や技法とは全く異なる形で、高まりつつあった国民意識を表現したのである。最もカナダ的画家たちの集団、といわれるゆえんである。



Tom Thomson 1877-1917 painter/peintre
CANADA 12

トム・トムソンの「四月のアルゴンキン・パーク」。記念切手から

これら一群の画家たちが作った、いわゆる「グループ・オブ・セブン」は、当初、A・Y・ジャクソン、J・E・H・マクドナルド、ローレン・ハリス、アーサー・リスマー、フレッド・バーリー、フランク・カーマイケル、フランク・ジョンストンの七人で発足したが、のちにジョンストンが脱退してA・J・キャソンが加わった。カナダのもう一人の世界的な画家トム・トムソンを「グループ・オブ・セブン」に加えることもある。



アーサー・リスマーの「松と空」

今世紀の始め、これらの画家たちのほとんどはヨーロッパ各地で腕を磨いていた。一九一一年頃になると、トロントで活動していたハリスとマクドナルドはカナダの大自然を主要なテーマに選び、彼らの絵画観をうちたてた。しばらくして、オンタリオ州の小さな町からトムソンとカーマイケルが、ハリス、マクドナルド、そしてトロント在住のもう一人の画家ジ

ョンストンに加わり、さらに英国から帰ったばかりのリスマーとバーリーが、そして一九一三年には、これらトロントの画家たちに共鳴していたジャクソンが仲間入りする。

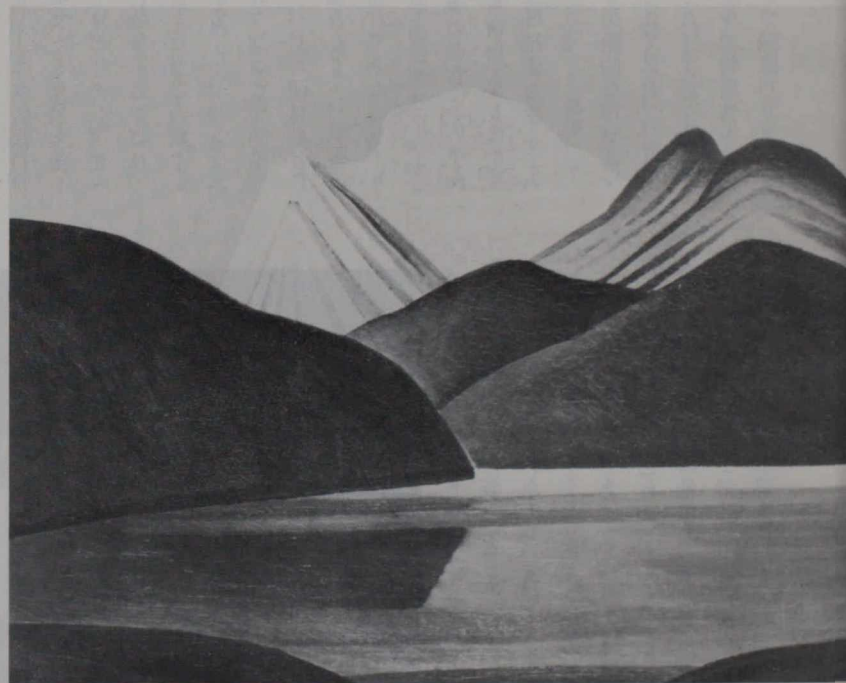
彼らのうち、トムソン、ジャクソン、リスマー、バーリーらは、トムソンが好んで訪れたアルゴンキン州立公園（トロントの北方にある、およそ一万平方キロの自然保護地）で一緒に絵画活動に入った。マクドナルドの「ガティノー川に浮かぶ材木」やジャクソンの「アルゴンキン公園のブルー・リバーと岩」などは、その頃の作品である。第一次大戦中は、兵籍に入って戦場に送られたり、戦争画

家になるのもあって、集団としての創作活動は中断した。トムソンだけは北方で創作を続けていたが、一九一七年七月、彼が愛したアルゴンキン公園で溺死してしまった。画家としてまさに熟達の域に達しようというときであつた。

一九二〇年五月、残ったカーマイケル、ハリス、ジャクソン、ジョンストン、リスマー、マクドナルド、バーリーの七人は「グループ・オブ・セブン」を結成した。規則もなく、例会ということもなかった。

その年にグループがトロントで発行したカタログは、彼らが「カナダにおける絵画について何年か同じような考えをもっていた」とし、国がその国民にとって真の故郷となるには、まず芸術が花咲かなければならない——と信条を述べている。

カナダの社会的要請やカナダ独特の状況に彼らは応えるべきだ、と考えていたのである。カナダが強固な実在性を発展させる上できわめて有意義な作品を自分たちは生み出しているのだ、と主張してやまなかったこれらの画家たちは、生存中、すでに賞賛と批判の嵐に巻き込まれていた。彼らの作品は過激的だとされ、彼らは嘲笑的となった。しかしカナダ的画風をうちたてた七人は、臆することなく



ローレン・ハリスの「山々と湖」

論陣を張り、絵筆をとって自分たちの考えを確認していった。そして彼らの真価もだんだんと認められるようになり、今ではカナダの大自然および北方の人々に対する記念碑として、またカナダ人の自己発見を熟練した筆で表現したものととして高く評価されている。

一九二五年になって、ジョンストンがグループをぬけ、代わってカーマイケルの弟子キャソンが加わった。今年七十九才のキャソンは「グループ・オブ・セブン」の唯一の生存者で、現在も創作活動を続けている。このほか、「グループ」と関わりあつてきた画家として、ケベック在住のエドウィン・ホルゲートと、一九五六年に死んだレモイン・フィッツジエラルドの二人があげられる。